

1A 火による選り分け 49－53

2A 主体的な判断 54－59

3A 他人事にははいけない災い 1－5

4A 最後の執り成し 6－9

本文

私たちはルカによる福音書 12 章 48 節まで読みました。話は途中で終わってしまったのですが、それまでのお話しをおさらいしてみたいと思います。私たちは今、イエス様と弟子たちのところに、多くの群衆が来ています。けれども、今はエルサレムに行く旅の中にあり、ご自身が拒まれることをご存知の上で向かっておられます。群衆はイエスに付いてきていますが、実はこの方の本質を受け入れておらず、誤った動機で付いてきています。一人が、遺産相続について自分の兄弟に話してくれ、と遺産相続の仲介をお願いする人がいました。そこでイエス様は、遺産相続の問題ではなく、そこに潜む貪欲の問題について取り上げられました。そして弟子たちには、何を食べるか、何を着るのかを心配せず、何はともあれ、神の国を求めなさいと勧めました。

そして、イエス様は神の国が到来することに目を留めるように勧めます。ご自身が戻ってくることを語りました。主がいつ戻ってこられるか分からないのだから、いつも用心して、目を覚ましていなさいと命じておられます。それからペテロが質問しました。それは群衆に対しての言葉か、それとも私たち弟子たちに対しての言葉なのか、尋ねました。イエス様はそこで、弟子たちが思慮深い僕になるように勧めました。主人がいつ戻ってきても、きちんと僕が世話している者たちに食事を与えているかどうか、与えているのを見られるならば全財産を任せられる。そうでなく、下男や下女を打ち叩き、酒を飲んでいるなら厳しく罰せられる、と話しておられます。

1A 火による選り分け 49－53

そこで、イエス様はご自身が戻ってこられること、いや既に来られていることについて次のように表現しました。

12:49 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。

この「火」とは何でしょうか？これは、バプテスマのヨハネが語った聖霊と火のバプテスマでありましょう。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。(ルカ 3:16-17)」聖霊と火のバプテスマにつ

いてヨハネは語りました。イエス様が聖霊に拠って大いなる業を行われました。そして、人々が同じように聖霊の火によって清められることを望んでおられます。しかし、今、聖霊の業に対して拒むばかりか、それをサタンの仕業にしました。それで、火が燃えていないことを嘆いておられます。

しかし、イエスを受け入れる者にとっては聖めの火であります。受け入れない、拒む者にとっては裁きの火でもあります。ヨハネは、「殻を消えない火で焼き尽くされます。」と言いました。キリストにある命を受け取っていない者は、中身のない殻であり、燃えつくされてしまいます。キリストが戻ってこられる時は、主は火を持ってこられます。そして主の働きは、必ず麦と殻を分ける、選り分けが起こります。

12:50 しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。

主は、聖霊と火によるバプテスマを与えられますが、その前にご自身がバプテスマを受けなければいけません。これは、十字架の苦しみのバプテスマです。バプテスマというのは、特別な名称ではなく、「浸す」という意味のギリシヤ語です。ですから、水の洗礼の儀式だけでなくこのように、浸される、一体化するという意味を言い表す時に「バプテスマ」という言葉を使えます。イエス様は、聖霊のバプテスマによって弟子たちに力を与えられる前に、火によって人々を選り分け裁かれる前に、ご自身が苦しみのバプテスマを受けるようになると言われているのです。

12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。12:52 今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。12:53 父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」

イエス様は、確かに地に平和をもたらすために来られました。主がお生まれになる時に、天の軍勢は神を賛美して言いました。「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように、(2:14)」しかし、主の平和が人々に訪れるには、この方を自分の主として受け入れ、ひれ伏さないといけません。天使たちが言ったように、「御心にかなう人々に」平和が訪れるのです。

しかし、現実には主の平和を受け入れる人とそうでない拒む人々に分かれます。それがここで言われている「分裂」です。これが、先にバプテスマのヨハネが語った、「麦から殻を取り除く」その選り分けの始まりと言えます。そして、その分裂は厳しい現実ですが、最も強い結びつきを持っている家族の中でさえ起こります。私たちの間では、これは実感をもって受け止められるのではないのでしょうか。一つの家庭の中で、イエス様を主としている人々とそうではない人々には、聖霊によらなければ埋めることのできない溝ができます。信じていない人が悔い改めてイエス様を受け入れない限り、その溝は埋めることができません。迫害されている国では、人がイエス様を信じると親が息子、娘を絶交します。正統派ユダヤ教徒では、もう息子は死んだということで葬儀をするという

話も聞いたことがあります。

そこで私たちは、「自分を捨て、自分の十字架を日々背負い、そしてわたしに付いてきなさい。」という弟子の道があるのです。日本の文化において、「対立を避ける」という大きな課題があります。それは「和を尊ぶ」というすばらしい面がある一方で、「真実な平和が来るために、避けて通れない葛藤」を避けようとする力が働きます。前回の学びで、「人を恐れることによって、人の子を人々の前で認めな」という問題をイエス様が取り上げられました。人の目を気にしながら生きる時に、私たちは何としても神の目を気にして生きなければいけません。

2A 主体的な判断 54-59

12:54 群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が起るのを見るとすぐに、『にわか雨が来るぞ』と言い、事実そのとおりになります。12:55 また南風が吹きだすと、『暑い日になるぞ』と言い、事実そのとおりになります。12:56 偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。12:57 また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。

イエス様が言われたこの言葉、地や空の気候の徴を見分けることができるのに、なぜ今の時代の徴を見分けることができないのか？というの、マタイによる福音書にもあります(16:2-3)。イエスが約束のメシヤであること、旧約聖書の預言者が預言したとおり、イエスが成就しておられること、その徴が数多くあるのに、なおのこと徴を求めてイエスを試す、その頑なさをイエス様は嘆いておられます。

けれども、今ここでイエス様は、「群衆にもこう言われた」と言われています。53 節までは弟子たちに語っておられましたが、今は群衆に話しておられます。ここでは、群衆がパリサイ人やサドカイ人など、ユダヤ人指導者の言うことを鵜呑みにして、自ら判断していないことを嘆いておられるのです。57 節に、「なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。」とイエス様が言われています。

自ら進んで、という言葉が大事です。主体的に、主がなされていることが果たして約束のメシヤのなされること、その通りのことであるかを自ら進んで判断することができるのです。ところが、彼らはただ、ユダヤ人指導者の言われるままにしている受動性があるのです。

神の前に立つ時に、人間はおのおのが申し開きしなければいけません。「人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。(黙示 20:13)」したがって、自分の人生について自分が責任を負わなければいけないのです。ところが、「これまで、このように教えられてきたから。」「このように、これまでやってきたから。」「今まで聞いたことがない。」というような理由で、神の前に出ていきません。人には、自由意志があり、そして正しく判断できる能力も与えられています。それを放棄して、ただ言われるままに生きることをイエス様は咎めておられるのです。

12:58 あなたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するよう努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行きます。裁判官は執行人に引き渡し、執行人は牢に投げ込んでしまいます。12:59 あなたに言います。最後の一レブタを支払うまでは、そこから決して出られないのです。」

この喩えは、他の福音書では人と和解しなければいけない、赦しが必要であるという文脈の中で出てきます。イエス様は人との関係でこのことを話しておりません。これは、ご自身と群衆一人一人の関係の中で話しておられます。イエス様が告訴しておられる方です。そして、裁判官は父なる神です。イエスが罪の定めようとしている中で、しっかりと和解しなければ永遠の刑罰の中に入れられることを警告しているのです。

キリストが十字架で死なれる言葉は、和解の言葉です。「2コリント 5:18-21 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。」神の和解を受け入れるかどうか、一人一人に問われています。

ここのイエス様の言葉で大事なのは、「熱心に」という言葉です。主が戻ってこられること、主が裁かれることについて、熱心に自問自答しなければいけないということです。しっかりと、主がなされようとしていることを見る、霊的に怠けてはいけないということでもあります。霊的な勤勉さが問われています。

3A 他人事にはいけない災い 1-5

そして 13 章に入りますが、この話の続きです。

13:1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。13:2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。13:3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

これは、イエス様に時事問題、政治問題を尋ねているようなものです。先に群衆の一人が、相続財産について尋ねましたが、同じように主との関係を正す、霊的な質問ではなく、他の質問をしています。ピラトは、ローマの総督です。イエス様を十字架につける判決を下す総督です。具体的に、歴史上の何の出来事を指しているかは定かではないそうです。ピラトがこのようなことをしたであ

ろう、類似の事件は起こっています。カイザリヤが、ユダヤ属州の首都です。そこには、その首都に必要な水を確保するための、導水橋を建てました。その財源を得るために、ピラトがエルサレムの神殿の金庫から取って使ったというのです。それで怒ったユダヤ人が騒動をカイザリヤで起こしました。ピラトは、ローマ兵たちに一般の市民の服装を着せて、紛れ込ませて、そして一気に彼らを殺したと、ヨセフが言っています。けれども、その血をエルサレムで、ガリラヤから来たユダヤ人たちの捧げるいけにえに混ぜるといふことは、考えにくいので、また他の出来事だと思います。

ここでイエス様は、ユダヤ人のしたことが悪いのだと言われたら、ユダヤ人の人気を失います。ユダヤ人たちはイエスに反対することでしょう。そしてユダヤ人の側につけば、ローマに反逆する首謀者と見られかねません。政治問題というのは、このように私たちにどちらに付くか、という党派心呼び起こします。

そうした争点ではなく、イエス様は根本的な霊的問題を取り上げられました。それは、「他人事のようにして、ガリラヤからのユダヤ人の中で起こった事件を語っているが、あなたがたは悔い改めなければ、同じように滅びるのです。」ということです。先ほどの話の続きです。おのおのが、イエスの証言に応答しなければいけないのです。それをせずに、他人の身に起こっていることを自分のこととして捉えていない、霊的怠慢について咎めておられるのです。

13:4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。13:5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

ガリラヤ人の件は人が引き起こしたのですが、自然災害においても、同じことが言えます。そのような不幸なことが起こったら、その人が何か悪いことをしたからだという議論にすぐに発展します。しかし、そうではなく、「あなた自身が悔い改めなければ、同じように滅びるのですよ。」という警告、注意喚起を神はそうした災難を通して教えておられるのです。

この言葉は、まさに私たちが日々、目にしているいろいろな事件や災害に当てはめることができます。東日本大震災の時に、「なぜ神はこのような悲劇をお許しになられたのか。」という声がたくさん上がりました。そしてある人は、「日本人は偶像礼拝を犯しているから、そのような災いに遭ったのだ。」と言いました。その発言に対してものすごい反発と批判が出ましたが、クリスチャンの間でこのような形でまことしやかに語られることを、残念に思います。そうではありません、なぜかは分かりません。しかし、人が罪を犯して、世界に罪が支配していて、そして破壊者である悪魔がいて、猛威を振っていることは確かです。そして神は憐れみをもって、すべてを滅ぼすことなく生き残っている私たちが悔い改めて、主の名を呼び求めるように、へりくだるように呼びかけておられるのです。

4A 最後の執り成し 6-9

13:6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』13:8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。13:9 もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」

イエス様は、神の裁きが間近に近づいていることを、この喩えを用いて語られています。ぶどう園にあるいちじくの木は、イスラエルの民を示しています。ところで、ぶどう園に、ぶどうではなくいちじくを育てるのは、よくあります。旧約聖書の中に、イスラエルがぶどうの木であるとか、いちじくの木であるか、喩えられています。そして、良い行いが実を結ぶことです。イスラエルが神に選ばれたのは、良い行いによって神の栄光を表すことです。

三年経っていますが、実を結ばせていないと主人がいます。これはイエス様が、約三年間、すでに宣教活動をされていることを示しているのでしょう。主がバプテスマをヨルダン川で受けられ、それからガリラヤで宣教を始められて三年が経つのに、悔い改め主を信じ、それにとまなう実が結ばれていなければおかしいのです。ところが、実を見ることができません。それで切り倒すと主人はいいます。イエス様は、ぶどうの木とその枝の例えも語られましたが、実を結ばない枝は焼かれます。実を結ぶからこそ枝の役割を果たすのであり、そうでなければ役に立たないのです。しばしば言われることですが、私たちは良い行いによって救われるものではありません。しかし、良い行いのために救われます。神の恵みによって救われた者は、良い行いによって救われたことを証します。

そして、イエス様はご自身を番人に喩えられます。イエス様が父なる神に執り成しをされます。もう一年そのままにしていただけませんか、肥しを入れて実が結ばれるために猶予をくれませんか、と願っています。これが、エルサレムに向かうイエス様の心でした。もうすでに遅すぎるのですが、それでも引き延ばして、彼らが実を結べるようお願いしています。

これが今、私たちが生きている時代なのだということを知る必要があるでしょう。主が戻ってこられるいろいろな徴があります。すでに、主に従う者とそうでない者の選り分けが行われています。主に属する者は聖霊によって清めを体験しますが、属さない者は火で焼かれます。患難によって滅び、また死後に永遠の滅びに遭います。しかし、神は一人でも滅びることを望まず、悔い改めることを望まれています。神は忍耐深い方です。